

## SPECIAL vol.12 「世界に 3.11 を伝えるシンポジウム」

VfF の一員として、2月に仙台で開催された「世界に 3.11 を伝えるシンポジウム」に参加しました。このシンポジウムはその名の通り、東日本大震災後の復興の様子、人びとの生活を、英語を使って発信するグループが集まり、それぞれの活動や課題を共有するために開かれました。主催は、東北大学と、VfFにも参加している Liz Mary さんが所属する、神戸の人と防災未来センターです。

シンポジウムには全部で12の団体から参加がありました。一口に「英語で発信」といっても、

地元のコミュニティラジオ局、ボランティアツアーガイド、大学の研究室、そして我々VfFのような翻訳コミュニティなど立場や伝え方はそれぞれ違います。一つ一つの発表を興味深く聞きました。

仙台のボランティアガイドのみなさんは、仙台のなかでもほとんど被災をしなかった人たちですが、震災後外国人の訪問客が増えたことによって、震災のことをより深く学んだそうです。私たちとよく似た Voices from Tohoku というグループは、上智大学の David Slater 教授のゼミが運営をしていて、被災者に丁寧なインタビューを行い、その声をインターネットでそのまま発信しています。

<http://tohokukaranokoe.org/>

シンポジウムの後半には、パネルディスカッションが行われました。参加者の中には、阪神淡路大震災後から、神戸で語り部の活動を続けてきた団体もあり、経験者の立場から、記録の継承は長く続けていると、あるとき転機が訪れるということ、ただ単に継承するだけではなく、学生や留学生などの新しい発想、知を入れてリフレッシュすることが大事、という意見が出ました。

VfF の活動に対しては、途切れることなく長く続いている理由は何かという質問が出され、「ひとりが全部の、役割を果たさないで、できるところを分担したこと」と答えました。さらには、避難所、寄り添いといった翻訳をするのに難しい言葉についてみんなで話をすることが、学びの機会になっているとの私の話には、特に学生から共感の声が上がりました。

またシンポジウムには外国のプロジェクトも参加していました。ハーバード大学のアーカイブプロジェクトです。

<http://jdarchive.org/ja/home>

VFF の活動に興味を示していただきました。なぜなら、彼らのシステムが自動的に収集する記事は日本語のみのものがほとんどなので、日英両方のキーワードを持っている VFF の記事はそれだけで価値があるそうです。これを機に、世界中の「3.11 の伝え手」がインターネット上でもつながれるとよいね、と互いに挨拶をかわし、新しいつながりに感謝して、シンポジウムを終えました。

Reported by Yoko Matsuda, Kwansai University Assistant Professor